

まえ つば
前坪古墳群

- 確認調査報告書 -

1998

掛川市教育委員会

前坪古墳群

- 確認調査報告書 -

1998

掛川市教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成8年度、平成9年度に実施した静岡県掛川市高御所に所在する前坪古墳群の株認調査報告書である。
2. 調査は土地区画整理事業に先立つ緊急確認調査で、調査費用の1/2を国、1/4を県の補助金を受け掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に際しては、土地所有者の方々をはじめ周辺土地所有者の方々には多大なご理解とご協力を頂いた。
4. 確認調査は、掛川市教育委員会の前田庄一が担当した。
5. 調査の記録は、掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 掘団における方位は、座標の北である。
2. 本所で使用した遺構名称は次の意味である。
SD：溝状遺構 SX：性格不明な遺構
3. 遺物の番号は、掘団と写真図版と同一である。

目　　次

I	発掘調査と遺跡の概要	2
1.	調査にいたる経緯と調査の目的	2
2.	調査の方法と経過	2
3.	古墳群をめぐる環境	4
II	調査の内容	7
1.	3号墳の概要	7
2.	2号墳の概要	8
3.	4号墳の概要	8
III	まとめにかえて	11
附載	浅間神社古墳群3号墳	12

挿図目次

第1図	周辺古墳分布図	1
第2図	前坪古墳群位置図	3
第3図	3号墳墳丘測量図	5
第4図	2号墳・4号墳トレンチ配置図	9
第5図	2号墳検出縄丈測図	10
第6図	出土遺物実測図	11
第7図	浅間神社古墳群3号墳墳丘測量図	13
第8図	浅間神社古墳群3号墳出土地輪実測図	14

図版目次

図版I	上 確認調査地点遠景	
	下 3号墳近景	
図版II	上 3号墳後円部東側平坦面	
	下 3号墳前方部先端	
図版III	上 3号墳第2トレンチ内葺石	
	下 3号墳第6トレンチ内葺石	
図版IV	上 3号墳第8トレンチ内葺石と段	
	下 3号墳出土遺物	
図版V	上 3号墳第1トレンチ内墳丘裾の葺石	
	下 3号墳第2トレンチ内葺石上の土器片	
図版VI	上 3号墳第6トレンチ内葺石残存部分	
	下 3号墳第9トレンチ内前方部先端の葺石	
図版VII	上 2号墳Aトレンチ内敷石状造様	
	下 2号墳Cトレンチ内方形周溝墓周溝	
図版VIII	上 4号墳Aトレンチ全景	
	下 4号墳Aトレンチ内SD03	



1. 前平古墳群 3号墳 2. 吉西大塚古墳 3. 春林院古墳 4. 素盞口古墳群 5. 行人塚古墳 6. 鏡塚古墳
 7. 各和糸原古墳 8. 永遠寺古墳群 9. 権現山古墳 10. 宇佐八幡宮境内1号墳 11. 石ノ形古墳 12. 豊川古墳
 13. 高代山古墳群 14. 高津原古墳群 15. 若作古墳群 16. 清ヶ谷古墳群 17. 六ノ井古墳群 18. 不動ヶ谷古墳群
 19. 山瀬古墳群 20. 天王山古墳群

第1図 岡辺古墳分布図

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査にいたる経緯と調査の目的

市内高御所（こうごうしょ）地区は、丘陵があつたかも指を広げたごとに伸び、その指の間に谷が入り込む地形をしている。この丘陵の尾根上に古墳が点在することは、東名高速道路に伴う発掘調査や、昭和56年度から昭和58年度にかけて市内で実施した遺跡分布調査により明らかであった。高御所地区の東側の長谷（ながや）地区では、丘陵を削り谷を埋めての土地区画整理事業が現在進められている。この長谷土地区画整理事業に伴い掛川市教育委員会では、平成7年度から用地内の発掘調査を実施している。この発掘調査により、それまで知られていなかった古墳や横穴墓、集落などの存在が明らかとなった。長谷土地区画整理事業は高御所地区との境までが計画用地であり、平成7年度には高御所に隣接する場所で前坪古墳群6号墳の発掘調査を実施した。この前坪6号墳の調査時に西に連なる丘陵を踏査したところ、今まで円墳と考えられていた前坪3号墳が前方後円墳である可能性が考えられた。

この3号墳周辺では、高御所本村地区土地区画整理事業の計画が立てられていたことから、市教育委員会では、平成8年1月18日に区画整理事業の担当課に前方後円墳らしい地形があると伝えた。そして、2月19日に長谷土地区画整理事業用地内の遺跡の取扱いについて協議した折りに、前坪3号墳の確認調査について協議し、これを実施する方向で合意した。そして平成8年度に、前坪3号墳が古墳であるかどうかを確認するための調査を実施した。

この確認調査により、前坪3号墳が古墳時代前期に位置づけられる前方後円墳であることが判明したことから、その西に位置する2号墳と東に位置する4号墳について、3号墳との関係を把握するための確認調査を平成9年度に実施するに至った。

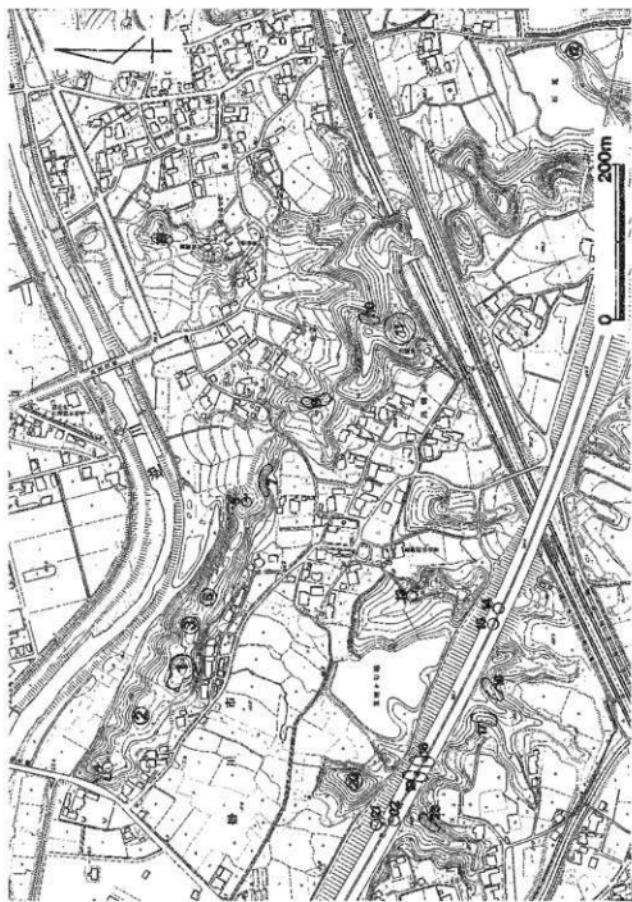
2. 調査の方法と経過

3号墳は、前方部を北西に向ける前方後円墳であり、南半分が山林、北半分が茶畠となっていた。茶畠は、すでに人の手は加えられておらず、茶の木が大人の背丈以上に伸びていた。確認調査は、主として茶畠部分を対象として行うことにして、茶の木の伐採から着手した。茶の木を伐採したところで、前方後円の形が明瞭となったため、後円部と前方部に幅1mのトレンチを計9本設定し、人力で掘削した。各トレンチは、古墳であることを確認した段階で掘削を終了した。この3号墳の確認調査は、平成8年度に、トレンチ掘削とラジコンヘリコプターによる景観写真撮影を実施し、平成9年度にラジコンヘリコプター使用の空中写真による縮尺100分の1の墳丘測量図を作成した。

2号墳は全体が山林であり、樹木をそのまま残してトレンチを設定することとした。この2号墳の調査では、地山の礫を使用した葺石状のものが確認された時点で、また主体部状の掘り込みを確認した段階で調査を終了したために、掘り込みの規模等の確認までは至っていない。

4号墳は全域が茶畠であったが、北側半分の茶の木が伸び放題になっていたので、この部分にトレンチを設定し、茶の木の伐採後トレンチを掘削した。この4号墳の確認調査では、溝状構造の規模を確認した段階で掘削を終了した。

そして、2号墳、3号墳、4号墳のトレンチを埋戻して確認調査を終了した。



1. 前坪古墳群3号墳
2. 前坪古墳群2号墳
3. 前坪古墳群4号墳
4. 前坪古墳群1号墳
5. 前坪古墳群5号墳
6. 前坪古墳群6号墳
7. 本村横穴群B群
8. 向山横穴群
9. 山越横穴群
10. 前山横穴群
11. 浅間古墳群3号墳
12. 西泊古墳
13. 本村古墳群3号墳
14. 東照ヶ谷古墳群2号墳
15. 東照ヶ谷古墳群1号墳
16. 本村横穴群D群
17. 本村横穴群C群
18. 本村横穴群B群
19. 本村横穴群A群
20. 天上原古墳
21. 本村古墳群2号墳
22. 本村古墳群1号墳
23. 黒敷越横穴群

第2図 前坪古墳群位置図

3. 古墳群をめぐる環境

掛川市内の古墳・横穴墓の総数は約1400基と推定され、そのうちの約1200基が古墳時代後期の古墳や横穴墓である。横穴墓は推定1000基を数え、県内屈指の横穴墓分布地となっている。

市内には、小規模な古墳群は数多く存在するが、大規模な古墳群としては市の西端の2級河川原野谷川沿いの河岸段丘上につくられた古墳群があるにすぎない。この古墳群は、5世紀前半から5世紀末までの前方後円墳と円墳で構成され、北から、全長55mの前方後円墳である吉岡大塚古墳、直径30mの円墳の春林院古墳、全長43mの前方後円墳の行人塚古墳、全長63mの前方後円墳の瓢塚古墳、全長66mの前方後円墳の各和金塚古墳、袋井市域に入り全長35mの前方後円墳である椎現山古墳、全長30mの前方後円墳である宇佐八幡宮境内1号墳、直径27mの円墳の石ノ形古墳、原野谷川左岸の円墳で、円筒埴輪、形象埴輪が出土した原川古墳等から成る。

原野谷川左岸の岡津原には画文蒂神獸鏡が出土した奥ノ原古墳を始めとする鴨津原古墳群、この岡津原古墳群の北東に全長29mの前方後円墳1基を含む高代山古墳群がある。小笠山の北麓に分布する若作古墳群は、5世紀後半から6世紀前半にかけて造られた円墳から成る古墳群である。源ヶ谷古墳群は、方墳1基、円墳6基を調査し、時期は5世紀中ごろから6世紀前半に位置づけられる。六ノ坪古墳群は、3基の円墳を調査し、6世紀前半に位置づけられる。不動ヶ谷古墳群は、5世紀後半から6世紀初頭に位置づけられる円墳6基を調査した。天王山古墳群は、前方後円墳1基を含む古墳群で、5世紀から6世紀初頭の古墳群と推定される。

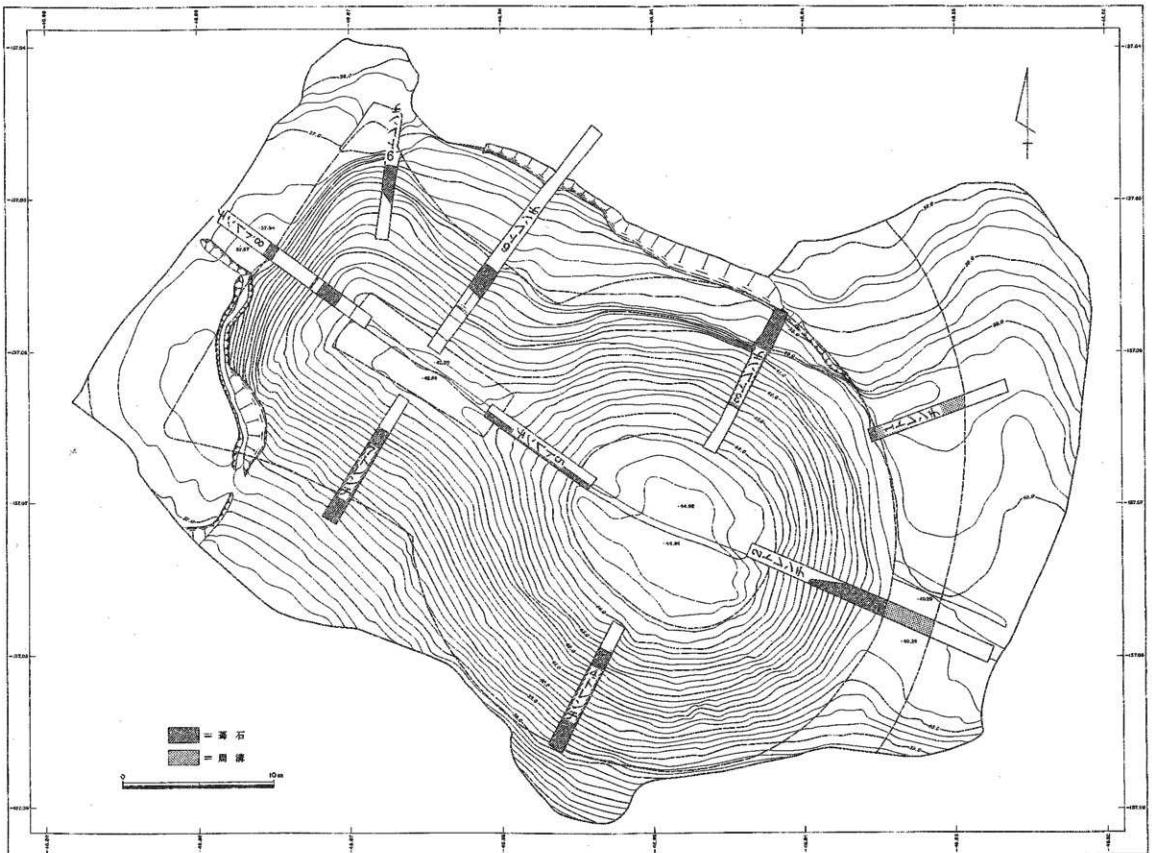
前坪古墳群の近辺では、円墳と横穴墓の分布が知られている。

前坪古墳群の南の丘陵には、円墳と横穴墓が分布し、円墳では、本村古墳群1号墳、2号墳、東照ヶ谷古墳群1号墳、2号墳が東名高速道路建設に伴い調査された。これらの古墳は、直径10m前後の規模で、5世紀末から6世紀初頭に位置づけられる。このほかの古墳では、天上塚古墳が未調査であるが、直径20m前後の円墳と推定される。そして、この丘陵の斜面には6世紀中ごろから7世紀後半に造られた横穴墓群が分布している。

前坪古墳群が存在する丘陵の東端では、長谷土地区画整理事業に伴い、前坪6号墳、浅間神社古墳群3号墳、西池古墳の各古墳と、本村横穴墓群E群3基、向山横穴墓群3基、前山横穴墓群4基、山脇横穴墓群3基が調査されている。前坪6号墳は、墳丘基底の盛り土の検出と須恵器片の出土をみたが、後世の改変により規模等は明らかではない。浅間神社古墳群3号墳は、調査前3基から成る古墳群のうちの1基と考えられていたが、調査の結果、1号墳、2号墳が古墳でなかったため、単独1基の古墳であることが判明した。西池古墳は、直径20m、高さ2.5mの円墳で、主体部は、割竹形木棺1基、箱形木棺3基の計4基が墳頂部いっぱいに造されていた。割竹形木棺の主体部からは、底面に円窓が詰められた排水溝が墳丘外まで伸びていた。古墳の時期は、5世紀後半から5世紀末ごろと考えられる。

横穴墓群のうち、向山横穴墓群からは、須恵器田辺編年のMT15型式に位置づけられる須恵器が出土していて、県内はもとより東日本最大の横穴墓群である。前山横穴墓群からは、TK10型式の須恵器が出土している。向山横穴墓群、前山横穴墓群は、羨門部の閉塞に扉は使用されず、羨門部に幅10cm程度の溝が掘り込まれていることから木を閉塞に使用したものと考えられる。

前坪古墳群を形成する古墳のうち1号墳については、推定地の半分が墓地のために削られていて、削られた断面では盛り土や主体部等は確認できない。5号墳については、直径20m前後の円墳と考えられるが、墳頂部の4分の3がすでに削られている。この削られた断面では造構等は確認できない。



第3図 3号填堤丘測量図

II 調査の内容

1. 3号墳の概要

3号墳は、丘陵の先端から200mほどの位置に造られた前方後円墳である。後円部墳頂の標高約45m、水田面との比高差約27mを測る。古墳の南半分は山林、北半分は茶畠となっていた。

前方部の南側から先端、そして古墳の北側から後円部の東側にかけて平坦面があり、茶畠となっていた。後円部の東側の茶畠の高さは、前方部西側の茶畠より約2.8m高くなっている。

墳丘は、原形をよくとどめていたが、後円部北側裾と、前方部の両端が畑の開墾により削り取られていた。また、墳丘南半のくびれ部から前方部にかけては農業の利用により若干削られていた。3号墳の確認調査は、古墳であるかどうか確認するための調査であり、幅1mのトレンチを設定して、掘削した。墳丘測量は、現況の測量であるため、等高線は25cm間隔で、縮尺100分の1で作図した。

第1トレンチ

地山の礫を使用した葺石と古墳の裾、古墳の裾から続く黒色土を確認した。黒色土は、幅約6mを測る。古墳とは反対側の壁が垂直に立ち上がるのが気になるが、ここでは崩潰と考えておく。

第2トレンチ

墳丘斜面において地山の礫を使用した葺石を確認した。葺石は、墳頂部から約2.6m下がったところから裾にかけて検出した。葺石のない部分は、茶畠の耕作の時に邪魔になるためにはずしたものと考えられる。第2トレンチで検出された周溝と考えられる黒色土は、幅約3m、深さ約25cmであった。墳丘裾のレベルは、第1トレンチで確認した裾のレベルより約60cm高くなっている。

第3トレンチ

検出された葺石のうち裾に近い部分は残存していたが、墳丘のものは原位置から動いていた。

第4トレンチ・第7トレンチ

葺石が崩れた状態で検出された。古墳の裾は確認していない。

第5トレンチ

10cm程度の礫が散在する。敷き詰めるという状況ではない。

第6トレンチ

前方部頂から約1.9m下がった標高40.7m付近で幅約80cmの段のような平坦面を検出した。そして、この段状の平坦面から下で葺石を検出した。葺石は、25cm前後の大きさの地山の礫が使用されているが、その中に1点長さ約60cmの河原石が用いられていた。

第8トレンチ

前方部頂から約90cm下がった標高41.7m付近から葺石を検出し、標高40.20m付近で幅約60cmの段を検出した。段から裾までの間の葺石はほとんどが畑の開墾の時にははずされていた。この葺石のはずされた部分で、盛り土である黒色土と黄褐色土の互層を確認した。

第9トレンチ

前方部北側先端部分に設定したトレンチで、標高39m付近から下に葺石が残存していた。墳丘裾の葺石は畑の開墾時に抜き取られていた。

後円部東側裾から後円部墳頂までの高さ5.2m、後円部墳頂と前方部頂の比高差2.5mを測る。古墳がのる基盤層が後円部方向から前方部方向に傾くために、前方部は裾から頂までの高さ5mを測る。

2. 2号墳の概要

2号墳は、3号墳の西約90mに位置し、最高所の標高約39.3mを測る。直径約20m、高さ約2mの円墳状を呈するが、頂上付近から北を畠の開墾により削り取られている。

A トレンチ

表土直下から数cmの大きさの礫が敷きつめられたような状態で検出された。礫の実測後、トレンチの北半分を掘り下げたところ、礫の下から第6図-4の須恵器坏身もしくは有蓋高坏の坏部と思われる個体、さらにも同様の個体片1点、器種不明の須恵器口縁部破片が出土した。

Aトレンチと南北方向のBトレンチが交差する頂上部において、性格不明な遺構SX01を検出した。SX01は、地山である茶褐色土を掘り込んだ遺構で、東西方向か南北方向に主軸に向ける遺構である。遺構の規模を確認するところまで調査はしていないが、東西方向に3m以上の長さを有する。

B トレンチ

斜面から地山の礫を用いた葺石状の遺構が検出された。葺石と呼ぶにはあまりにまばらであるが、15cmから25cmの礫が使われていた。Aトレンチで検出した葺石状の礫とは明らかに大きさが異なる。この葺石状の礫を実測後、トレンチの東半分を掘り下げたところ、トレンチの北半分からは黒色土があらわれ、部分的にではあるが黒色土中に厚さ約10cmの黄褐色土の盛り土が見られた。

C トレンチ

斜面から東側の平坦面にかけて設定したトレンチで、Bトレンチ同様、斜面では15cmから25cm程度の礫が散在している状況が見られた。礫の実測後に北半分を掘り下げたところ、礫の下約20cmのところで地山に達した。

東側の平坦面では、表土下に黒色土が厚く堆積していた。この黒色土を除去したところ、溝状遺構と考えられるSD01、SD02を検出した。SD01の西側の肩は黒色土を掘り下げていないために検出していない。このSD01、SD02は、直角に配される溝である可能性が高く、性格としては方形周溝墓の崩壊の可能性が高い。SD02の確認面の幅約1mを測る。

3. 4号墳の概要

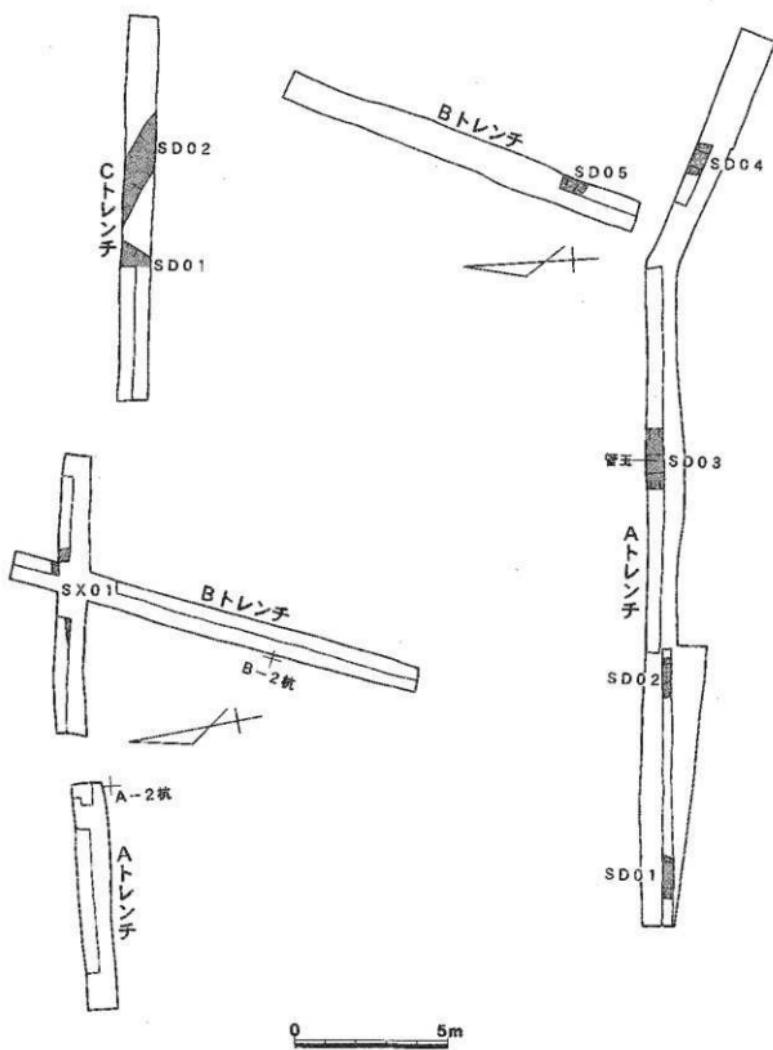
4号墳は、3号墳の東約50mに位置し、最高所の標高約44.5mを測る。小高くなっている程度であったが、頂上付近から北と東を畠の開墾により削り取られている。

A トレンチ

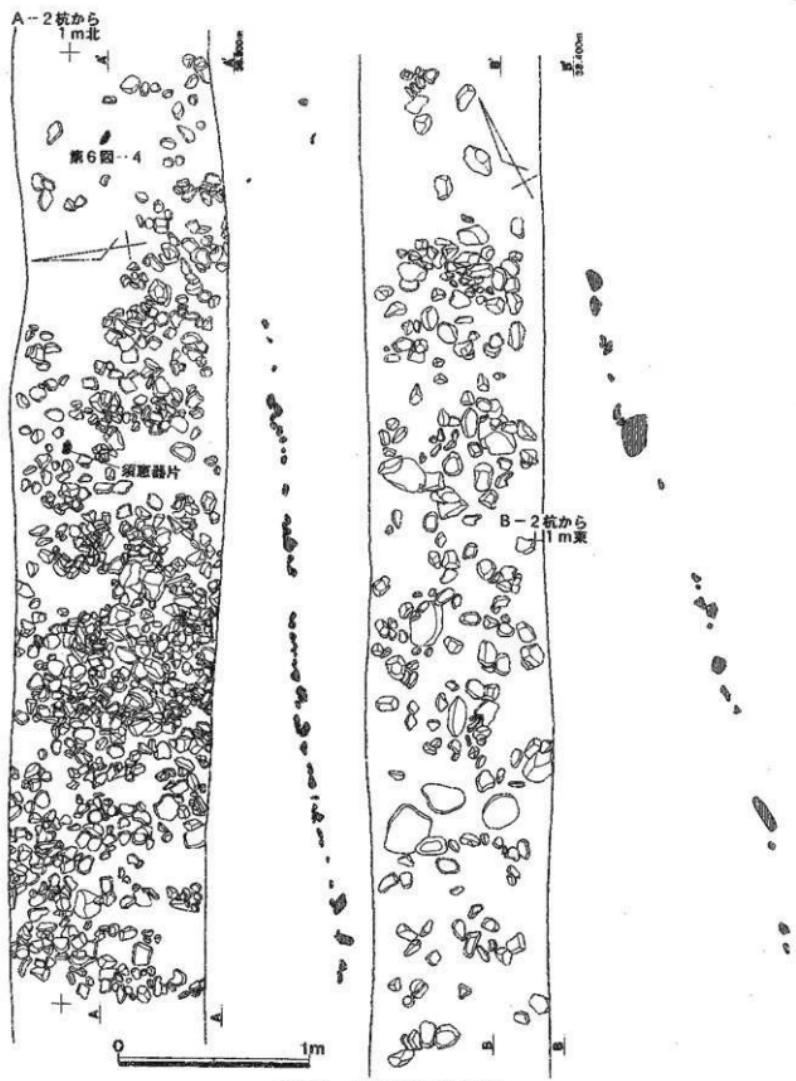
頂上の平坦面の東端、頂上から西に下がった傾斜から平坦面に移行する場所、そして西端の平坦面から合計4本の溝状と考えられる遺構を検出した。SD01、SD02は、2号墳のBトレンチ同様地山の円礫の散布が見られ、その下から検出したもので、黒色土を覆土とする。SD01、SD02間は、約5mを測る。SD03は、幅約1.7mを測る。掘削途中で緑色凝灰岩製の管玉が出土したために、掘削を中止した。管玉検出面までの深さ約90cmを測る。管玉とともに土師器の小片が出土した。SD04は、幅約1.2m、深さ約70cmを測り、覆土中から弥生土器と思われる小片が出土した。

B トレンチ

頂上平坦面の北端において溝状遺構SD05を検出した。溝は、茶畠の耕作で削平を受けていて、底面近くが残存していたにすぎず、幅約90cm、深さ約25cmを確認した。底面のレベルは、SD04より約30cm高くなっている。



第4図 2号墳・4号墳トレンチ配図



第5図 2号墳検出確實測図

IIIまとめにかえて

3号墳の各トレンチからは、土師器壺の破片が少量出土している。第6図-1は、第8トレンチ内前方部先端の西側から出土した土師器壺の口縁部破片で、外面に縱ハケを施し、内面の下半に斜めハケ、上半に横ハケを施す。外面に赤彩がかすかに残る。2は、第8トレンチ内の前方部の段から出土した土師器壺の口縁部破片で、器表の剥落により調整は不明であるが、外面に指による押圧の痕跡が残る。小破片のため、径は不明である。3は、第2トレンチ内後円部の葺石上から出土した土師器壺の底部破片である。

3号墳から出土した土師器壺は、古墳時代前期に位置づけられる。3号墳の次に築造されたと考えられる浅間神社古墳群3号墳が5世紀初頭に位置づけられることからも、前坪3号墳の築造時期を4世紀の後半から末に位置づけることができる。

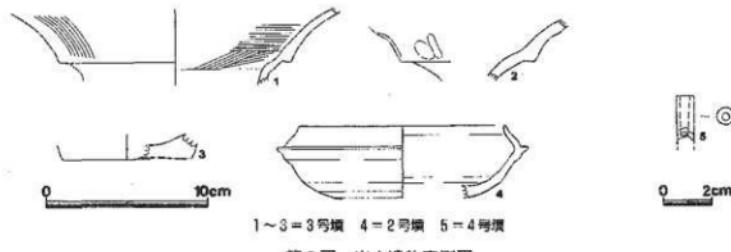
今回の測量調査による3号墳の規模は、全長47m、後円部の径29.5m、後円部の高さ5.2m、前方部の長さ17.5m、前方部の幅推定で25mである。

今まで、掛川市内の古墳は5世紀前半の各和金塚古墳から始まると考えられていて、県内の他の地域に比べて半世紀ほど古墳の築造が遅れるとなっていたのが、古墳時代前期に位置づけられる前坪3号墳の確認により、市内でも県内の他の地域同様、4世紀代から古墳の築造が始まったことが証明された。

2号墳では、巖石状の連構の下から第6図-4の須恵器が出土している。このことから6世紀代に何らかの形で使用されたことがうかがえる。頂上から検出されたS X01は主体部の可能性が高く、斜面から盛り土が検出されていることから古墳の可能性が高いが、時期は今のところ断定できない。また、弥生時代の方形周溝墓の存在も明らかとなった。

4号墳からは、弥生時代中期の土器片、土師器片と緑色凝灰岩製管玉の出土により、弥生時代中期と古墳時代に使用されたことが明らかであり、溝状濃溝の存在から、方形周溝墓の可能性が考えられる。

今回の2号墳から4号墳までの確認調査による弥生時代中期の方形周溝墓の推定と、古墳時代前期の前方後円墳の確認は、長谷上地区画整理事業用地内の前坪古墳群と同一丘陵における弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期の土坑墓、古墳時代中期初頭の浅間神社古墳群3号墳の確認と合わせて考えると、この丘陵上が弥生時代中期から古墳時代中期初頭に至る墓・塚が連續と造られた墓域であったことを示すものであり、貴重な遺跡であることが明らかとなった。



浅間神社古墳群 3号墳

浅間神社古墳群は、調査前は3基から成る古墳群と考えられていたが、調査により単独1基の古墳であると判明した。この古墳は、前坪3号墳と同一丘陵上、約500m南東に位置する。前坪3号墳とこの浅間神社古墳群3号墳との間に、前坪5号墳、前坪6号墳が存在するが、この2基の古墳は大きくて直径20m程度の円墳と考えられ、前坪3号墳に匹敵する古墳は浅間神社古墳群3号墳である。墳頂の標高58.9mを測り、前坪3号墳より14mほど高い所に造られている。

古墳は地山を削り出して造られていて、盛り土は、傾斜している墳頂部を平らに整えるために使用されているにすぎない。葺石は存在しない。

墳頂の南端の一部と墳丘の4分の1弱を茶畠の造成のために削り取られている。

古墳の北端には、底面の幅2.3~2.4m、深さ80cmの丘尾切斷の溝がある。

墳頂の平坦面は、東西11m、南北10mの規模である。墳頂の大部分は後世に削平を受けているが、残存している北端の縁辺からは埴輪の底部が並んで出土していることから、本来は墳頂部の縁辺に埴輪が並べられていたものと推定される。古墳は、東西37.5m、南北41.5mを測る円墳である。古墳の裾の標高は東側が53.9m、西側が51.6m、南側が51.7m、北側が51.5mであり、東側は西側、南側、北側に比べ約2.3m高くなり、墳頂までの高さは、東側で5m、西側、南側、北側で7.3mを測る。墳丘の南斜面と北斜面にはテラスがある。南斜面のテラスは、標高53.5mから53.7mあたりに80cmから1mの幅で、南斜面のテラスは、海拔53.6mから53.8m付近に70cmから1mの幅で削り出されている。西側の裾には、幅約2mの平坦面が削り出されている。

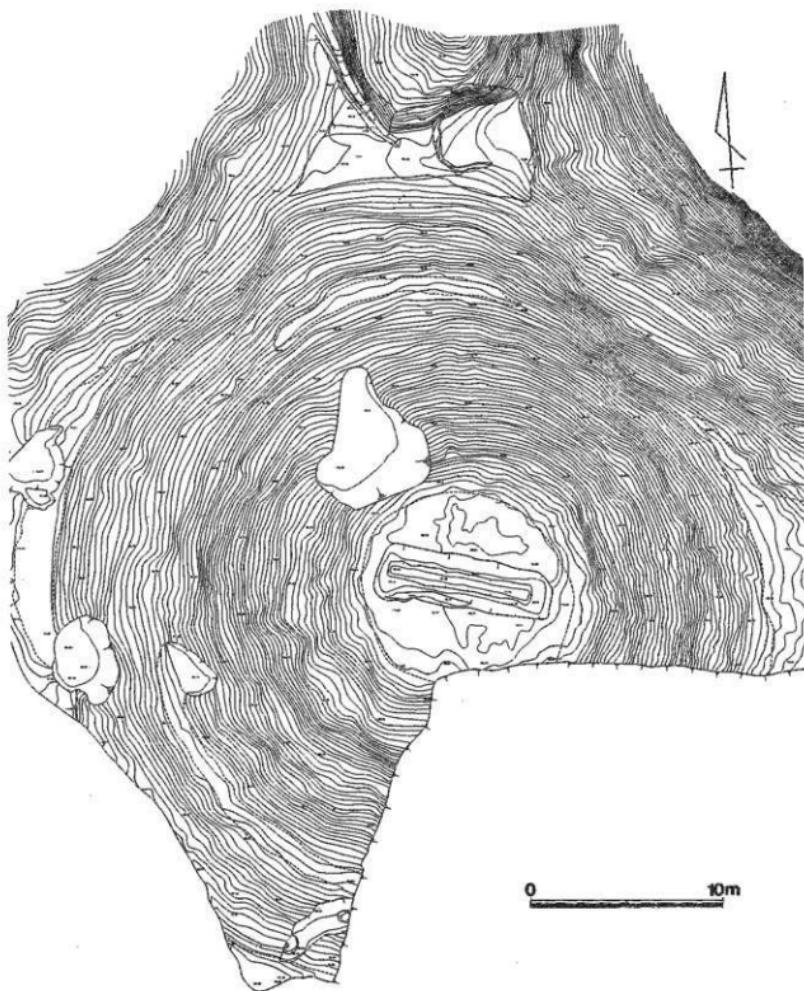
東側の墳丘裾には、1m~1.15mの間隔で4個体の埴輪底部が並んでいた。このほかに朝顔形円筒埴輪片、円筒埴輪片が、南側裾、西側裾、北側テラス、北側丘尾切斷の溝内から出土しているが、原位置を留めるものはない。また、水鳥の可能性のある形象埴輪の破片が丘尾切斷の溝の東端から出土している。

主体部は、墳頂部の中央に納められた割竹形木棺である。掘り方は2段に掘られていて、上段の掘り方が幅2.5m、長さ9.1m、下段の掘り方の幅は、西端で85cm、東端で95cm、長さ7.5mを測る。確認面から墓坑底面までの深さ約1.1mを測る。墓坑の底面は水平に掘られていて、排水溝はない。棺の被覆に粘土は全く使用されていない。

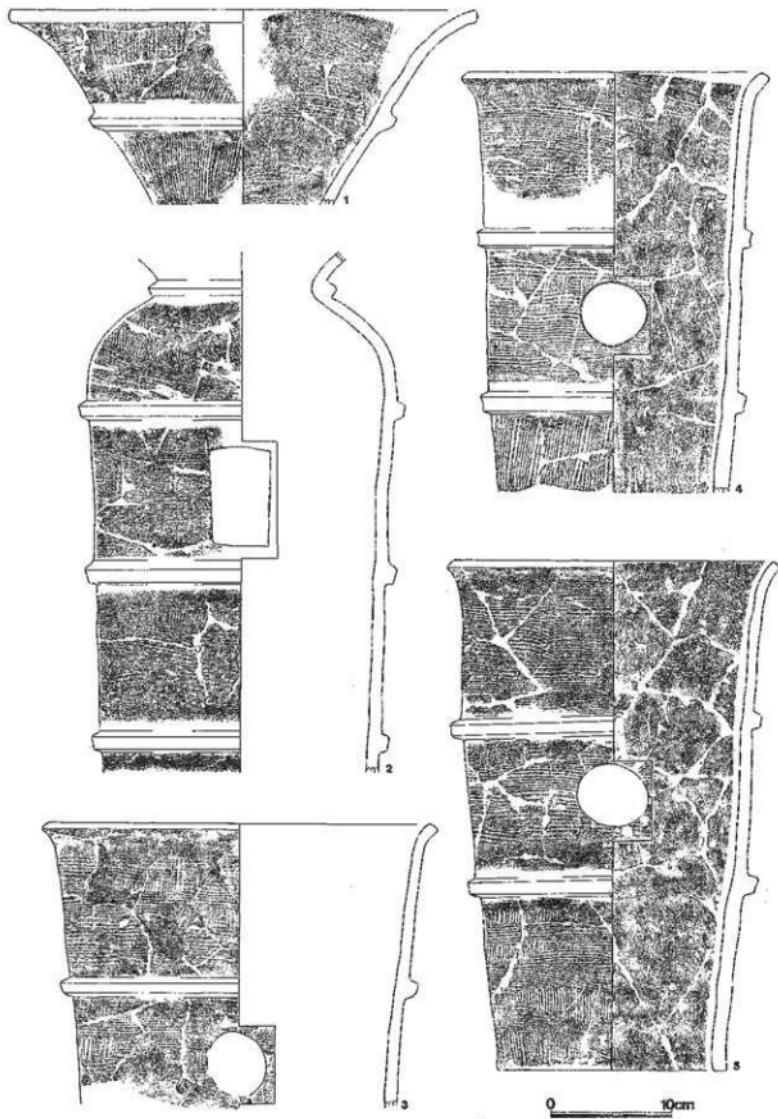
この墓坑内から、鉄劍1、鉄鎌30、刀子2、鉄斧7、ヤリガンナ5、鉄鎌3、鉄錐先2、鉄釣り針3などが検出された。これらの鉄製品は、墓坑内の中央から東で出土した。

遺物は、墓坑内から上記の鉄製品のほかに、南側テラスから土師器壺が出土した。

第8図-1は、北側テラス上方から出土した朝顔形円筒埴輪の口縁部破片で、口径39.0cmを測る。外側の調整は、縦ハケ、内面に横ハケを施す。2は、北側テラス上方から出土した朝顔形円筒埴輪の円筒部で、基部を欠損する。3段目に長方形の透かしが2方向にあく。外側の調整は、横ハケが施される。肩の部分には横ハケが残る。3は、西側裾から出土した円筒埴輪で、口径32.8cmを測り、図示した4、5より一回り大きい。透かしは円孔で2方向、外側に横ハケを施す。内面はナデ仕上げとなる。4は、北側裾より出土した円筒埴輪で、口径25.2cmを測る。外側の基部は縦ハケ、2段目に横ハケ、3段目に横ハケを施す。内面はナデ仕上げであるが、口縁部付近に横ハケが残る。5は、西側裾より出土した円筒埴輪で、口径27.6cm、底部径18.8cm、高さ42.2cmを測る。2段目に円孔を2方向にあける。外側は横ハケ、内面はナデ仕上げで口縁部下に横ハケをわずかに残す。



第7図 浅間神社古墳群3号墳墳丘測量図



第8図 浅間神社古墳群3号墳出土埴輪実測図

図 版

図版 I



確認調査地点遠景



3号墳近景



図版
II



3号墳 後円部東側平坦面



3号墳 前方部先端



図版
III



3号墳 第2トレンチ内墓石



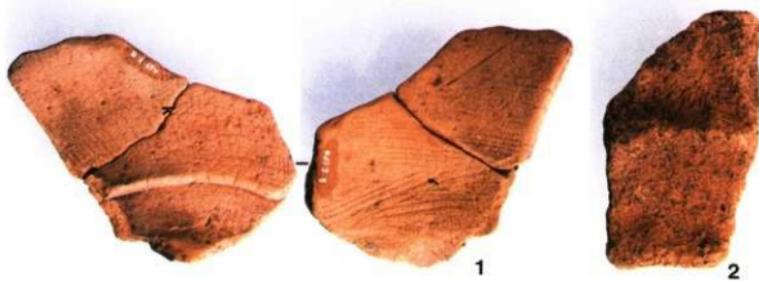
3号墳 第6トレンチ内墓石



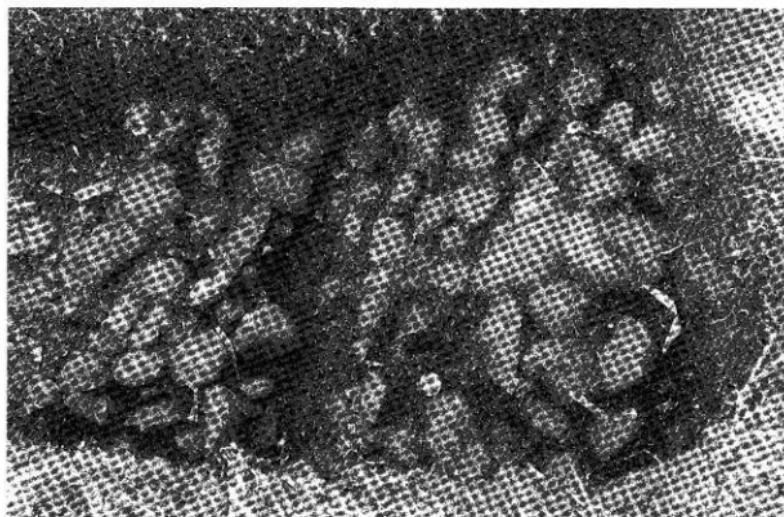
図版 IV



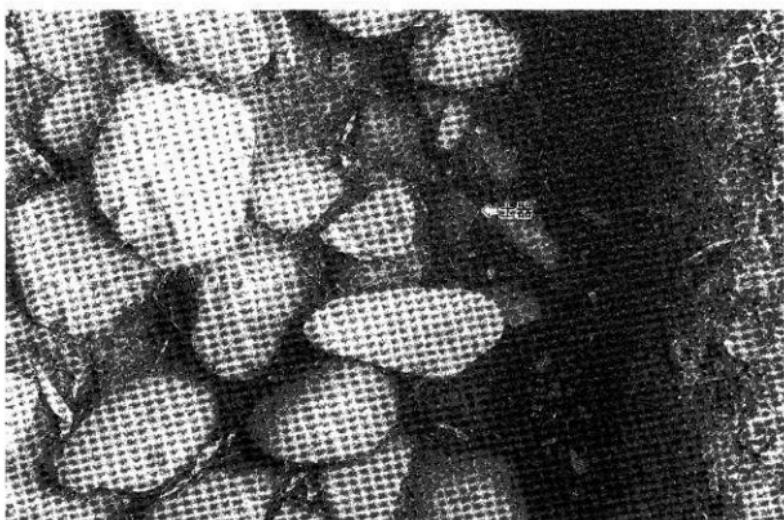
3号墳 第8トレンチ内葺石と段



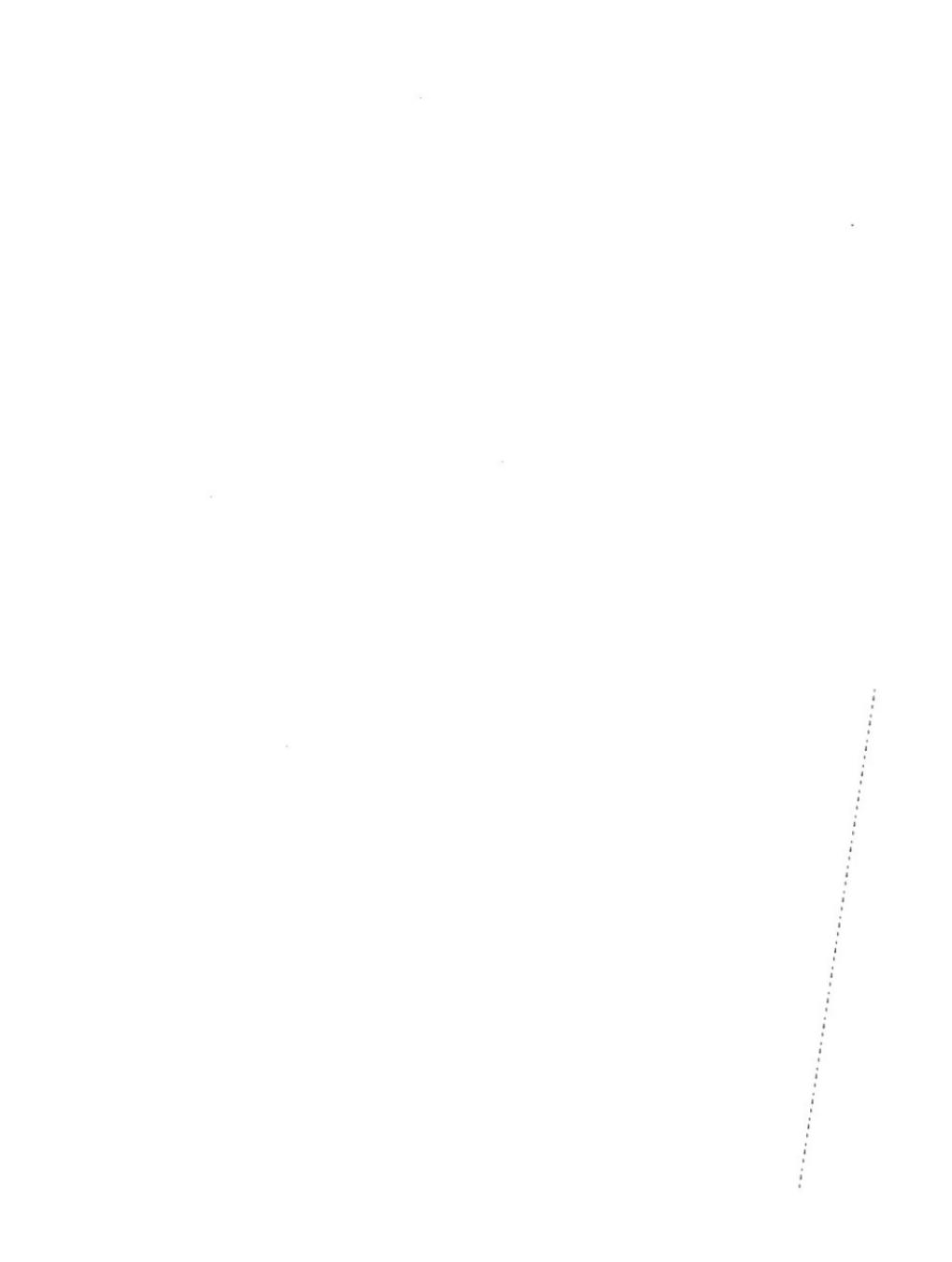
3号墳 出土遺物



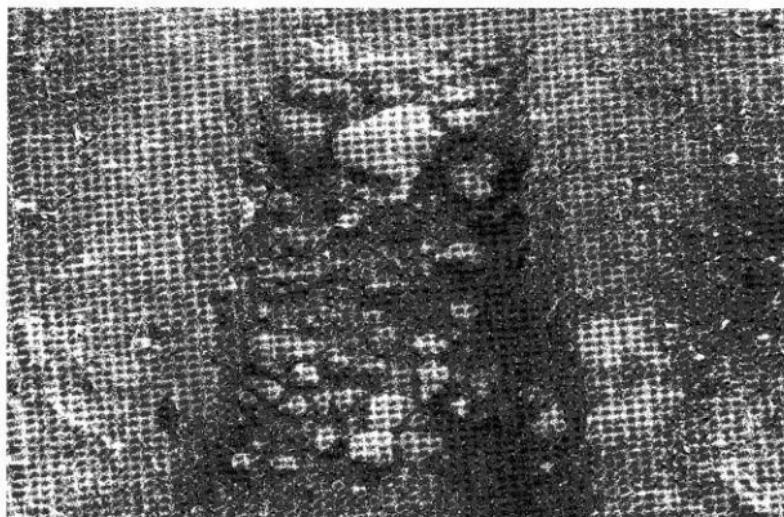
3号墳 第1トレンチ内埴丘掘の葺石



3号墳 第2トレンチ内埴石上の土器片



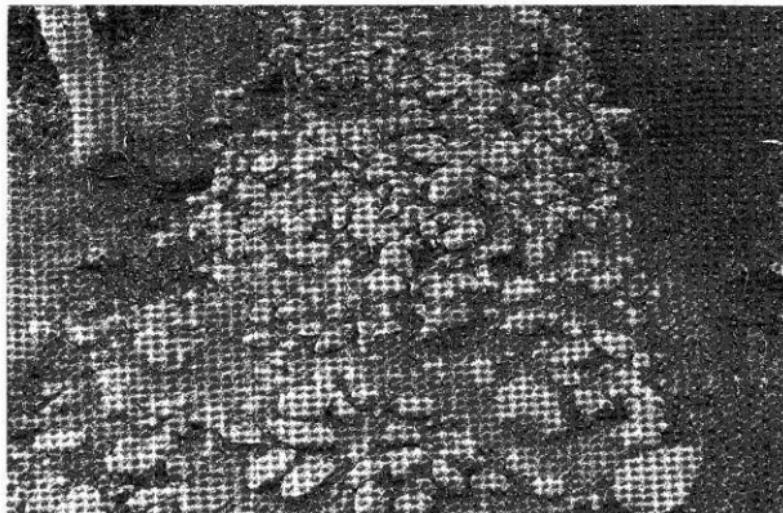
図版 VI



3号墳 第6トレンチ内葺石残存部分



3号墳 第9トレンチ内前方部先端の葺石



2号墳 Aトレンチ内敷石状遺構



2号墳 Cトレンチ内方形周溝基周溝

図版
VIII



4号墳 A トレンチ全景



4号墳 A トレンチ内 SD03

報告書抄録

ふりがな	まえつけこふんぐん							
書名	前坪古墳群							
副書名	確認調査報告書							
編著者名	前田庄一							
編集機関	掛川市教育委員会							
所在地	〒436-8650 掛川市長谷701-1							
発行年月日	平成9年3月25日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
まえつけこふんぐん 前坪古墳群	しづかがんかけがわし 静岡県掛川市 こうこうしょ 高御所1446-1外	22213	63-2~4	34度 46分 29秒	135度 58分 08秒	19961001 19980325	1,700 m ²	区画整理事業
所集遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
前坪古墳群	古墳	古墳時代	古墳	土師器				

前坪古墳群 確認調査報告書

平成10年3月25日

編集発行 掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷701-1

TEL (0537)21-1158

印 刷 株式会社 彩光堂
静岡県掛川市宮脇248-1
TEL (0537)24-0013

